方向　第二七号　一九八四年一月一日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（一〇）

赤谷明海

〈昭和二十年一月十一日の項につづく〉

○兵站宿舎での生活も既に十日に近くなつた。毎日の日課といへば食ふ事と寝る事、全くこれ以外には何もない。この有り余つた時間を、考へるではなく読むではなく、豚の如く寝ころがり、ただ食ふ事を楽しみにして、一日の長いのを嘗つてゐる。新聞の見られない我々にも、ルソン島に米軍が上陸し、伊勢神宮が爆撃された事は判つてをり、且つ又、年令のみ徒に過ぎて学業の成績が上らないのを悔い日々忽々と明け暮した昔の自分が全然死んだ訳でもない。斯の如く己の現在する環境の切迫さも、己を生かさんとする意欲の在り様をも知りながら、而も尚かくの如く茫然としか在り得ないのはどうした事か。まだ軍隊ぼけするには早い自分なのだが。（二〇・一・二〇）

○昨夜内地からの慰問演芸を観たが、腹話術以外、左程いいと思つたものがなかつた。洋舞の不自然な阿ユ的な笑ひ、漫才のマンネリズム的な種〈たね〉等、不愉快なものである。（一・二一）

○兵站宿舎で出合つた者に、同じ部隊の坂本があり、武昌で同室だつた芝上等兵及び熊田一等兵がある。孰れも

入院下番。そして誰しも自分と同じ様に短期間の〈入院の〉積りだつたものが、何時の間にか半年以上を過してしまつた訳である。かう云ふ様な連中が、支那、満州と、あちこちを廻らされながら、国家の粟へぞく・経費〉を費し、戦力を消耗する事しかしてゐないのである。輸送上の欠陥もあり、病院設備の不整さもあるが、何物にもまして大きいものは員数的なものの考へ方である。或は事なかれ的な聯責観である。誰しもその欠点に気付きながら、国家とか軍隊と云ふ大きい所在に身を任し、己の当座の責任を果しておけば事足れりとする考へ方、これがいけない。小にしては食缶一つの洗ひ方、僅かに二、三指を余計に動かせば足りる事を、労を愛へおし〉んで不充分な洗ひ方ですまし、自らは食缶を洗つたと云ふその事で、仕事が終つたものと考へてゐる。これが員数的と云ふものである。軍隊の隅々にまでこの種のものが充ち亘つてゐる。要領を構へると云ふのも結局この事であり、この員数的な要領が屢々迅速果断的な徳と混同されることがある。（一・二一）

○人を招待して御馳走をする。その場合、御馳走することは好意を表現する手段であり、それがため招待された人は感謝し恐縮するのである。ところが世慣れた人間は兎角利益のために、言ひかへれば賄賂として御馳走する。それを受けた人間は、或者は好意からのものと買ひかぶり、或者は賄賂と知りつつそれを普通のこととして享受する。この場合、前者は勿論世慣れぬ人間に多く、後者は商才に長け、処世の裏道に通じた人々に多い。而して国民性の上でも、日本人は前者に属し、支那人には後者に属する者が多い様である（一・二三）〈まだ出発命令が出ない。誰から借りたのか『ファウヌト』を次に引いている。手帳は横書き。〉

○ Malgalete　ハインリッヒ、私に約束して下すつて

Faust　　何なりとも

M　あなたはあの神様の事をどう思つてゐらつしやるの。あなたは本統に好い方でゐらつしやるけれど、そんな事はどうでもいいやうに考へておいでのやうに、私には思へますの。

F　もうそんな事はやめて貰ひたいね。僕がお前を好いてゐる事は分つてゐるだらう。僕は好いてゐる人のためには肉も血もいらない。その人の感情も宗教も奪はうとは思はない。

M　それはいけないと思ひますわ、だつて信じなくてはいけないものですもの。

F　いけないかい。

M　ああ、あなたを本統にどうかしてあげられるといいのですが。あなたは秘跡もお敬ひにならないのでせう。

F　敬つてゐるよ。

M　でもお敬ひにならうと思つてではないのでせう。弥撒や懺悔にも長らくおいでにならないのでせうね、あなたは神様をお信じになつて。

F　一体誰でも私は神様を信じてゐると云へるものがあると思ふかい。坊さんにでも聖人にでもさう云つて聞いてごらん。その返事は唯聞いた人を嘲けるやうにしか聞えないものだ。

M　そんならお信じになりませんの。

F　と云つて聞き違へをしては貰ひたくないよ。一体誰が神の名を口に唱へたり、私は神を信じてゐると告白することが出来るであらう。又自分が感じて、私はそんなものを信じない、と敢て云ふものがあるだらう。万物

を包む者、万物を保つてゆく者は、お前を、わたしを、又それ自身をも包んで、保つてゆくではないか。天はあの通りに、上の方で円天井のやうになつてゐるではないか。それから地面は、かうして下の方でしつかりしてゐるではないか。永遠の星は優しい目をしながら昇つてゆくではないか。かうしてお前の目を見てゐると、あらゆる物がお前の頭へ、お前の胸へ迫つて来て、永遠の秘密の中に見えないやうで、見えるやうで、お前の傍に漂つてくるではないか。お前の胸がどんなに広くても、それを一杯に入れて充して、お前がその感情の中で祝福を感じた時には、それをお前の好きなやうに名をつけるがいい。幸福とも、情愛とも、恋とも、神ともいふがよい。私はそれにつける名を知らない。すべてが感じだ。名は天の火を霧のやうに包む音と煙に過ぎない。

（ファウスト第一部、マルテの家の庭。秦豊吉訳）

○南京の空襲が何時の頃から屢々行はれる様になつたのか判らないが、昨年の九月頃は全然なかつたのに、この頃では毎日の様にやつて来る。今日も浦口辺がたたかれて煙が盛んに立つてゐる。敵襲があつても友軍機ははるかに遅れて飛び立つたり、高射砲は皆目当らないので、見てゐて全くはがゆい。而も敵の投弾は相当的確で、昨日使役に行つた貨物廠倉庫の被害状態など、見事に命中してゐる。ところで、この方面の屢々の空襲が何によつてなされるのか、桂林、柳州へ桂林の南〳〵の飛行場が壊れへ日本の制圧下に入る〳〵てから余計に敵機が来るのはどうした事か。此方の飛行機が少くて制空権にゆらぎが出来たのか、それとも比島作戦の牽制として、今が特に覗へねら〳〵はれてゐるのか。何にしてもかう毎日毎日南京あたりに敵をよせつけてゐる様では将来が想ひやられる。（一・二七）

○何故にかうも生に執着するのか。尚も再び家郷の山河に遊び、親しき人々と語らはんとするのか。愛する件もやがては遠ざかり、今の楽しみは何時までもその儘に続くものではない事を知らないと云ふのか。知りて尚且かくも恋々と未練〳〵がましい己であるのか。汝はもつと恬淡と死滅に赴く用意があつて然るべきだらう。（一・二八）

○健康状態。天津を発つときに作つた靴傷が八分程癒えて来た。風邪から併発された蓄膿症か、それとも顔面神経痛か、額が痛む。食欲は十分でなく、胃の調子が大分狂つてゐる。（一・二八）

○天使。なんぢらの物にあらずば　避けよかし。なんぢらの心を妨ぐるものは　退けよかし。なほ強く迫らば心を　はげめよかし。愛は愛する人のみ　引き入るものぞ。（ファウスト）

○ファウストの死（ファウスト云フ）

あの山の傍に沼が横たはつて、今まで出来上つたものを悪くする。あの腐つた溜り水を流してしまふのが、最後の仕事として最も大切なのだ。ここでおれは幾百万人の為に土地を開いてやる。人民共は安全ではないが自由に働いて住まへるのだ。野原は緑に肥えて来る。人と家畜はこの新しい土地の上に、大胆に勢心に人民が築き上げたあの丘の……の方に、すぐに移り住んで来るのだ。外では海の流れが岸まで荒れ狂つて来ても、この中はまるで天国のやうな土地だ。海の潮が力任せに取り込まうと、見ぬ間に食ひついてこようが、大勢一緒に突進して、その穴を塡めてしまふ。さうだ、おれはこの意義に服従する。それは人間の智慧の最後の断案だ。それは自由でも生活でも、毎日これを征服する事によつて、初めて之を我物に享有出来るといふ事だ。ここでは子供でも大人

でも老人でも、みんなさういふ危険に取巻かれて、忙しく働いて年を過すのだ。おれはさういふ群集を見たい。自由の土地に自由の民がゐるのを見たい。おれは刹那に向つてかう云ひたいのだ。お前は実に美しい。だからここに止つてくれと。おれがこの世に過した日の痕は永劫の中に滅びはしない。さういふ大きい幸福を予感して、おれは今最高の瞬間を味ふのだ。「ファウスト倒れる」（メフィストフェレス）どんな楽しみにも飽きず、どんな幸福にも満足しなかつた男だ。変つてゆく姿を追うてはこれに媚びて、最後の、悪い、からつぽの瞬間といふものを、可哀さうにしつかりと握らうとした。おれにも随分頑固に反抗したが、時が勝つて、ぢいさんめ、かうして砂の中にころがつてゐる。時計は止つた。

○『ファウスト』を読了。山崎克己が天津を一足先に発つときにくれたものである。外に読む物のない兵隊暮しのこととて、一頁一頁をおへをゝしむやうに読んで来た。途中理解し難い点もあるにはあつたが以前外国文学全集で茅野（ママ）へ蕭々ゝさんの訳で読んだ時よりははるかに判つて来た。今度のは新潮文庫に編まれた秦豊吉氏の訳。（一・二九）へ住所録によれば山崎氏は新潟県の人。記憶なし。

○唐懐素　草書千字文

『書史会要』懐素尤モ書ヲ好ミ、翰墨ニ精意シ、追倣（ヤ）損マズ、禿筆塚ヲ成セリ、一日夏雲ノ風ニ随フヲ観テ頓ニ筆意ヲ悟リ、自ラ謂ヘラク、草書ノ三昧ヲ得タリ。ト。（藤沢桓夫「赤い月」中ノ「世話」）へ書家の懐素（七二五？－七八五？）と律僧の懐素（六二四－六九七）を同一人と思いこんでの記入であろう。ところで、いよいよ出発となった。寄せ集めの部隊編成で。〉

夜来庵かぜだより　ー若い日の森田曠平ー　（一〇）

原田憲雄編

〈一九三六（昭和十一）年　十　二　月　二　十　七　日　午前、聖護院局消印。はがき。

水甕〈昭和十二年一月号〉今日来た　お互に思はしくない　〈一月〉十日の〈京都支社〉歌会〈への出欠〉は君どうする？君の通りするから返事きかせてほしい　君にかりた本の悪口を言つて悪いが〈伊藤〉左千夫の小説はどうもすくはれないね　作者まで作中の少年の様にロマンチックになつてもらつては困る、以下同じ（これは特に野菊の墓に著しい）ボーは実にすばらしい　〈岩波文庫、ワイルドの〉サロメを読んだがあのビアズレイのサシ絵には狂喜した　サロメも実にすばらしい　息もつがずに読み終つた

〈右文中の『水甕』一月号の森田詠草は次のもの〉

大川の芦生のほとりに佗び住みて憤りつつ幾日経ぬるかも

秋の旅より

登り来てはるかに見れば伊賀の国古き国内（くぬち）は朝曇りせり

下草のもみづる山や蔦楓はぜもおほむね色づきにけり

峡深く汽車の太笛長鳴りてこだまはひくくこもらひにけり

あらはなる巌の迫る川の澪は白波たてり朝のくらきに

湧き上る川のたぎちを低く飛ぶ鳥のつばさの白きを見たり

との曇る紅葉の山に向ひつつ朝さむざむとしはぶきにけり

今しばしと思ひつつをりこの渓の夕かなしきに別れうべしや

十二月二十九日付、京都山端局消印、速達、手紙。

唯今手紙みた　本のことは承知した　僕が持つてゐても君が金が出来てほしくなつたら何時でも譲るから遠慮なく言つて来たまへ　本は君の方で持つてゐてくれ給へ　正月にでも又もらふから

〈「本のこと」というのは、原田が、佐藤春夫の詩集『魔女』『殉情詩集』を買ったが、その後、金のいることがあり、森田君に買ってくれとたのんだ。その返事がこれで、二円七十銭の為替が同封してあった。この日、あるいは次の日に受取っているはずだが、まぎれて、一月十九日になってこの手紙を見出している〉

この頃少し神経が疲れてゐる　よく夜なんか　うなされて困ることがある　だから街へ出たりするのがいやになる　又気がまぎれるかも知れぬが　作品があればみせてください

〈封筒と別々になっているので、確かではないが、この手紙に同封してあったものと推察される、巻紙に墨書された絵入りの手紙を次に〉

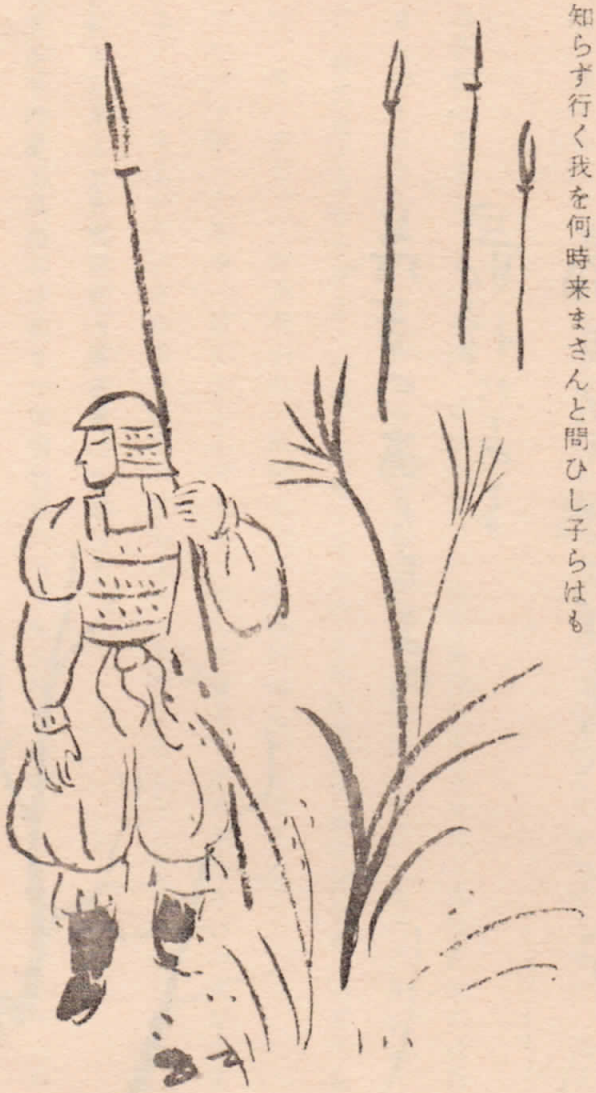
例によつて寝言を書く　前は絵のことを書いたから今度は歌にしよう

今月の婦人公論の始めの方に〈斎藤〉茂吉が現代歌人五十人の秀歌を選んで載せてある　ちよつと面白いと思つた

碓氷嶺にのぼりて見れば日の沈む信濃の国は起き伏しにけり

どうも好きだ　〈藤沢〉古実の作だが　こんな歌は実際ありがたい　こんな一本調子の澄みきつた歌は何と言つてい、か分らぬ程すきだ　その点防人の歌は泥が出る程うれしい

暗の夜のゆく先知らず行く我を何時来まさんと問ひし子らはも



切実な心から迸り出たものは人を感動させずにはおかぬ　かなしき子らを置いて遠い筑紫へに舳向ふ防人の気持は実際どんなものか想像も出来ぬ位のものだらう

ややしばし入日のかげをとどめたる山の頂を雲つつむなり　〈土田〉耕平

この崎の日のうらうらに黒潮は今日は来よらず沖流れたり（潮岬）　〈川田〉順

順のなんか相当　寂びがついてゐるが　それでも我々を感動させる

耕平のはやはりへ歌集〉青杉のころのが同感出来る　この歌なんかい、が青杉を不用意にひらいてみると実にいいのがある　そのひとつふたつ

雲はれて見ればさびしき山の峰ほのぼのとして雪ふりにけり

月させば大きく光る芋の葉に馬追一つ鳴きいでにけり

冬枯の山の木原をとよもしてただ吹きわたる風のさびしさ

茶吉のあらたまの
最上にある
朝あけ〻船より鳴れる太笛の
こだまは長し遠みよろふ山

十　二　月　三　十　日　　午前、聖護院局消印。はがき。

今日午ごろ速達出した　正月の歌会へは欠席にする　どうもこのごろは気分が勝れないで困る　詳しくは又会つた時話すがとにかく気が滅入る　大塚〈五郎〉先生にも会つたらそのこと話しておいて下さい　又手紙でも書くから

柴フネ〈尾上柴舟〉の歌僕はあまりすきでない、安部〈忠三〉氏の歌は大キラヒだ　大塚先生のは好きだつた

常ケン〈松田常憲〉さんのもどうかと思つたが二首位好きなのがある　加地〈富子〉氏の月集はいゝとしても滝野〈正三〉福田〈耕三〉両氏はどうかと思ふ〈加地・滝野・福田の三氏は水甕京都支社会員。いずれも森田・原田より古い人で、昭和十二年一月号で、詠草欄から一段階上の月集欄に進んだのであろう〉

〈アラン・ボオの〈アッシャ家〉への崩壊〉はいつよんでもいゝね、アメリアにもあんないい文学があるとは知らなかつた　「静かなるドン」をよみたいが古本ヤにないだらうか　あつたらしらして下さい

十　二　月　三　十　一　日　　午後消印。はがき。

正月には僕の方から君の宅へ行くことにする　一日の午后からでも大塚先生の所へ年賀に行きたいがとに角一度君の所へ行く、用事があつたら待たなくてもいゝ、　二日は都合が悪い　右迄　草々不一

一　九　三　七　〈昭和十二〉　年

〈この年、原田は日記を始めた。ただ、空白が多く、記入したところも歌稿が大部分だが、ここに参考になりそ

うな事項は節略引用しておく〉

〈原田日記一月一日〉午后曠平を訪ふ。大塚先生宅へ、とのことでそちらにまはる。〈同、二日〉殉情詩集・魔女の金をもらはうと思つて曠平を訪ねたが、そのことは言はずじまひ。〈同、三日〉二時頃曠平が来て、五日から九日まで紀州を旅したいが、祖母が一人で行くことを許さないから、ついて行つてくれないか、といふ。父に聞かなければ、といふと、失望した様な顔をする。夜、聞いて、明日返事をすることにする。ではこれから丹下左膳を見に行かう、といふことになり新京極にゆく。人の波で一杯。「美松」で握りずしを食つた。とてもうまいので十四、五平らげたへこれは森田君のおごりだったはず〉。帰って父の許しを得た。曠平は喜ぶだらう。〈五日、二人は和歌山県の大崎に行き、画家がよく写生に来るという漁師の兼業宿に泊り、たぶん七日、そこを出て印南、岩代、朝来（あつそ）をたずね、周参見にゆき一泊、八日、船で串本にゆき、串本から夜行の汽船で大阪にゆき、九日帰洛した。原田はまったくついて行ったというだけで、いっさいの世話は森田君がした。このときのそれぞれの短歌は『水甕』三月号に載った〉

一　月　十　九　日　　午後、三重大三局消印。絵はがき〈貝石山麓を流るる湯之瀬川〉

朝あけてうすぐもる日にいさゝかの露をたもちてそよぐ竹やぶ

何処よりか聞ゆる水の音のほかこの山かげにきくもの、なき

朝猟の馬いばゆるやたてがみの乱れたちたつ冬野のなだり

一　月　二　十　一　日　　午後、京都消印。はがき。

二十一日　急用あつて帰洛した　ハガキは拝見　静かなるドンはいらない　魔女の金は会つた時もらふ、写生に十津川の方へ行くかも分らぬ、近々は会へない

一月二十九日　午前消印。はがき。

気分がわるいから当分旅行しない、又遊びに来てくれ給へ　たいてい家で絵をかいてゐる、詩と随筆へ大塚五郎先生たちの雑誌〻も難産らしいね、インフレ景気のあほりはこんな所までも来る　今日　水ガメみた、　以上

『水甕』二月号の森田作品。

旅より

楓葉のいまだ青きも散りてゐつ蟲虫庵の林泉へしま〻のひそけさ

鈴鹿越

登り来れば日は曇りつつ並木路に風ただ高き鈴鹿山かも

しろじろと芒のなびく峠路は頂なれや風のつのりぬ

笹の葉のさやげる涯に秋深き幾重の山の起き伏せる見ゆ

脊椎カリエス

背の痛み稍覚えつつ病院の長き廊下通り整形外科病室に入る

短かかる命と思へや眼つぶれば軒をとよもす風の音

厨辺に皿の音すも病みてゐて今宵の菜を思ひめぐらす

裸にて立へち〳〵てゐにけり己が身に合はすギプスをとりつつ久しき

ひむがしにかぎろひ立てば雀らは天を舞ふなり吾は立たなくに

読みながら頭の痛くなりて来ぬ前田寛治の画論といふを

比叡ケ嶺の麓は曇る朝ぐもりややに晴れゆく雲は動けり

二　月　五　日　　午後消印。はがき。

明晩（土曜）伺ふかも分らぬ（あまり待たないやうに）　大塚先生の所へ持つて行く原稿まとめておいては如何？　以上

〈同日、原田日記〉午後、曠平来る。学校も面白くなし、家も面白くなし、といふところだつたので大よろこび。夕食を共にし、一緒に出て河原町で古本さがし。〈同、七日〉曠平を訪ひ、共に大塚先生を訪ふ。

はがき連句・秋風

高橋達明
山本のぶを
原田檪斎

初オ　秋風や小さな旅を思ひ立ち　檪　なにもかも澄みうるほひし石蕗の花　の

日々日脚はふ雁の寄る湖　の　逃水追うて婆の籠消ゆ　達

月今宵語り了へにし薪くべて　達　初ウ　獺の祭に鉾の琵（こと）をひき　檪

空徳利の酒買ひにゆく　檪　縫ひつもつれつ草めぐる蝶　の

衣々はうらみの舟に足搭りつ　達

岬まはれば淡路島なり　櫟

山たてて晦日迎ふ心地よさ　の

和尚の鬚をしごく一目　達

蚤はらふ裸の縁に月出でて　櫟

尿（しと）する馬の何くはぬ顔　の

言水を姪にくれける露の朝　達

歌仙の付句つけあぐねつつ　櫟

花筏漕手は雲に盗まれて　の

口にまねたる鶯のこゑ　達

名オ　釈奠や友みな遠く笛すさび　櫟

むせび泣きける竹叢の風　の

美しき尼守る庵に宿借りて　達

無骨無芸の茶漬かっこむ　櫟

ゆるゆると日落つる果ての夏木立　の

蛍出ぬ間に一首作らる　達

師の声に喚び起こす旗　銅の城　櫟

袖振る背子の心いとしも　の

山臥の兎負ひたる恋をして　達

古里すでに深き水底　櫟

大蔓月降りにけり奈良の街　の

菊も挿されぬ壺ぞ烏滸なる　達

名ウ　屁ひり虫くろく光れど飛びもせず　櫟

女ばかりをかこつ小屋懸　達

ゆくりなく潮騒のして山の畑　の

憂さもつらさも共に楽しみ　櫟

ざわざわと訪ふ人もあり花の暮　の

ひそかに芽吹く庭の枝々　達

興行　一九八三年四月より七月十六日まで

詞論

―李清照（九）―

原田愛雄

「中国の韻文学には、古くは周代の詩があり、漢魏六朝には古詩と楽府があり、唐代になって古詩に対して新しい近体の律絶がおこり、一方では楽府がようやくおとろえてきた。この楽府のちょうどおとろえるのとともに、また新しく勃興してきたのが詞である。詞ははじめ、曲子詞ともよばれ、楽曲の歌詞をさしていうものであるが、それが流行するとともに、唐詩などと相ならんで、一つの韻文学として成立したのである。」

これは中田勇次郎『歴代名詞選』の「叙説」の初めの文章。詞の成立にいたる中国の韻文の歴史が極めて簡浄に描き尽されている。さてこの詞、唐に先立つ隋の代に、その最も古い形のものを見ることができるが、唐の玄宗の時代から盛んになった、というのがほぼ定説となっている。

李清照に「詞論」と題する七百字ほどの文章があり、これが玄宗の時代から書き起こしている。それを拙訳しながら、清照にいたる詞の歩みをふりかえってみよう。

歌われる詩の作詞・作曲が並行して最も盛んになったのは唐代である。開元・天宝（七一三―七五六）のころ李八郎という歌手がいて天下の名人とされた。この時代、新たに及第した進士たちは長安郊外の曲江で祝宴を開く習わしだった。あるとき及第の一名士が、あらかじめ李をまねき、名前をかくし変装させ、ぼろ服、しょぼくれ姿のやつをつれて宴会に行き、「従弟なんだが席末に加えてやって下さい」といった。だれもかまいつけもしなかった。酒が一巡し、音楽がはじまり、歌手がステージに上った。曹元謙や念奴がいち

ばんうまい。歌がおわるとみなためいきをつき、ほめそやした。名士はひょいと李を指し「従弟に歌わせてやってください」人たちはあざ笑ったり、どなったり。ところが声をころばせ一曲うたうと、人はみな涙を流し「このひとは李八郎だ」と、さきの無礼をわびた。その後、「衛・鄭の音」といわれる心をとろかすような音楽・歌詞が日に日に盛んに流行した。詞調も、菩薩蛮・春光好・浪淘子・更漏子・浣渓沙・夢江南・漁父など、数えきれないほどであった。

どこの歌謡もそうであろうが、詞もまた民間の無名の歌い手の作にはじまり、プロの歌手によって洗練され、やがて作詞と作曲が専門の文人・音楽家の分業となり、精度を高め、極点に達すると歌詞は音楽から離れて自立し、文学となり、音楽性を失い、あるいは意識的に排除していって散文に転化し、詩としての生命を終る。

話は少し先走ったが、八世紀の前半は、まだ無名の歌い手の中に有名な歌い手が進出しはじめた時代で、その有名な歌い手にしても、歌妓・芸人、社会的地位はひくく、紳士、すなわち官僚や知識人はかれらをいやしめるのが一般であった。けれども、玄宗が大の音楽好きであった。治世の前半には精励し、側近に骨の硬い大臣もいて謹んでいたが、後半の天宝に入ると、享楽を追い、異国の音楽をも宮廷で演奏させるようになる。保守的な正統主義者は、堕落として批判攻撃する。しかし、「乱世の音楽」といわれる衛・鄭の楽は中国に生れた音楽で、その歌詞は『詩経』国風の大きな部分をなしている。異国の音楽にも荘重あり、典雅あり、悲愴あり、激烈ありで、白居易が新楽府で一概にけなしつけたような単純なものではない。とはいえ、上の好むところは下これよりもはなはだしく、天宝の世に音楽は大流行であった。「詞論」に見える曹氏についてはよくわからぬが、志奴を

玄宗が愛したことは前回に述べた。李氏にかかわるエピソードは唐の李肇の『国史補』にも見え、事実であろう。このときかれの歌ったのは自身の作詞・作曲で、聞く人は、その美声だけでなく、その詞意、その曲調にも深くうたれたに違いない。同じ代の詩人李白も詞を作ったと伝え、その作に「菩薩蛮」がある。

ひろのの林ばうばうと霧籠るごとく／寒き山こころ悲しきみどり帯びたり／暮れの色たかどのに入り／たかどののひと愁ふかな／／ひとけなききざはしにたたずめば／巣にかへる鳥とぶ疾し／きみかへる道はいづれぞ／大き駅ちひさき駅のさらにあなたぞ

通説ではこの詞調、九世紀なかばに成立したという。そのため李白の作であることを疑う説もあるが、近ごろまた李白作とする人が多くなった。作者がいずれであろうと絶品であることには間違いない。

玄宗自身も詞を作ったといわれ、「好時光」なる詞がその作と伝えられる。かれはまたみずから演奏に精しく、春雨が晴れ麗らかになった景色に対し羯鼓をとって即興演奏した。その調子が「春光好」。ただし詞はのこらぬ。後の人がその名で作る詞調はもとのものとは違っているらしい。「渉鐘子」なる詞調は唐・宋の詞には見えないようだ。「更漏子」は温庭筠（八一二！八七一？）が創め、「浣渓沙」は教坊すなわち官営楽団のレパートリーの一つ。「夢江南」は九世紀なかばの皇甫松の作にはじまり、「漁父」は「漁歌子」ともいい、八世紀後半の隠者張志和の次の作が最も早く有名だ。

西塞山のほとりには白き鷺飛び／桃の花ちる河水にうぐひ肥えたり／青き笠／緑の蓑／斜ふく風そぞろ降る雨いやさ帰るまい

玄宗の近衛兵で後に蘇州の刺史となった韋応物の「調笑令」

胡馬よ／胡馬よ／遠く燕支の山に放たる　／　沙をふみ雪をふみ独りいなゝき／東のぞみ西をのぞめど迷ふ路／路に迷ひ／路に迷ひ／草はてしなく日の暮るるかな

劉禹錫（七七二―八四二）の「竹枝」

しだれ柳は青々と江の水は平らかに／聞こえてくるのは主さんがうたふ舟歌／東の方から日が上り西の方では雨がふる／晴れもせぬのかはて晴れるのか

白居易（七七二―八四七）の「憶江南」

江南はなつかしや／さてもなつかし杭州よ／山寺の月かげに木犀をめで／郡の役所の手枕に潮騒をきく／いつまたあすこに行けるやら

これらの数少い文人の座興の作がちらほら出た後に、さきにふれた温氏、日本でならば「無頼派歌人」といわれた吉井勇に当りそうなこの詩人が、たぶんなじみの芸者たちに詞をふんだんに作ってやり、大流行したところから、このジャンルは文人に作者をふやし、作品は洗練される。数も一挙にふえる。

星まれに／楽やみぬ／簾の外に鶯と残んの月と／蘭に露しとど／柳なびき／庭をうづめて散りし花かも／／たかどのの／おばしまに眺むれば／よみがへる去年のかなしび／春暮れて／思ひ　尽きず／すぎし日のよろこびは夢のごとしも　（更漏子）

温氏については森鷗外の小説「魚玄機」にくわしく、唐・五代の詞のアンソロジー『花間集』には他の作者にぬ

きんでて六十六首を収める。

露おいた杏の花はにほふ雪の玉／青柳のちまたには別れぞ多き／ともしびに月おぼろ／覚めて聞く暁の鶯／／すだれかかぐる玉のかぎ／眉ほのかなる薄化粧／心にしみて春の夢鏡にかろき濡羽色かや　（菩薩蛮）

たかどのの月かげにつのるおもひや／柳の糸のなよなよと春ちからなく／門さきの草さえざえと／君を送ればかなしいななき／／カーテンの金の翠は／あかり消え香消えて涙となりぬ／花は落ちほとときすなき／窓べさまよふなごりの夢や　（〃）

うすぎぬの帯の香に／なほかけし別れし時の紅豆よ／涙のあとの新たにて／金の糸古り／はらわたを断つ／／つがひの燕なやましく語ひし／そは去年のこと／みどり影濃く／花すぎて／柳のわたぞ狂ほしき（酒泉子）

手にはめた金のおうむも／えりもとのぬひとりの鳳凰も目くばせしほのめかす／お嫁にいってをしどりになるはうがましだよと　（南歌子）

一粒の露凝って／波の影／池に満ち／緑のくきとくれなゐとふたつ乱れ／はらわたちぎれ／風すずしけれ（荷葉杯）

つづいて皇甫松。

蟠（ほぐそ）落ち／屏風ほのかに紅芭蕉／夢みしは江南に梅のうれし日／夜舟に笛を吹きしかな雨さやさや／人語る駅のべの橋　（夢江南）

つづいて韋荘（八三六―九一〇）。この人は唐末から五代にかけてのすぐれた詩人で、詞の名家。

四月十七／ちょうど去年の今日だ／君に別れたのは／涙かくして眉をひそめて／／みまかったとは思えぬが／ついてくるのは夢ばかり／空の月のほかには／だれも知る人はなし（女冠子）

現存する唐代の詞は、詩にくらべてはるかに少ない。実際に作られたものは何百倍もあったはずで、中にはみだらなものもあったろう。それらの多くは失われた。清照のころにはのこっていたろうものも無くなった。彼女が具体的にどれだけの作品を胸において言っているのかも、正確にはさぐりようがない。しかし、「衛・鄭の声」が日々に盛んになり流行したろうことは、当時の小説・筆記等を傍証として確かめうる。

ところで彼女の使った「衛・鄭の声」について私見をのべておきたい。『礼記』の「楽記」に「鄭・衛の音は乱世の音なり」という有名な句がある。古典にくわしい彼女のこと、それを含意してこの語を使った。だからここでもその前後の文を引いておく必要がある。

凡そ音楽というものは人の心から生れたものだ。感情が内部で発動するのでそれが声に形成される。声が文（あや）をなすのを音楽という。そういうわけで、治世の音楽は安らかで楽しい。政治が平和だからである。乱世の音楽は怨めしく怒るようだ。政治が民心にそむくからだ。亡国の音楽は哀しく物思わしげだ。人民が苦しむからだ。声音の道は政治と通じるところがある。宮・商・角・徴・羽の五音階の宮は君、商は臣、角は民、徴は事、羽は物を象徴する。五音が乱れないとき音楽は破綻しない。宮が乱れると音楽は荒れる。君が驕るからである。商が乱れると音楽は偏狭になる。臣道が壊れているからだ。角が乱れると音楽は憂わしい。民が怨むからだ。徴が乱れると音楽は哀しい。民事が苦しいからだ。羽が乱れると音楽は急迫する。民

の財物が乏しくなるからだ。五音が乱れると、各音がしのぎ合う。これを「慢」という。音楽がこんな状態になると国の滅亡は近い。鄭・衛の音楽は乱世の音楽だ。「慢」に近い。古代夏・殷末期の音楽は亡国の音楽だ。政治が荒散し民が流亡する。（楽記）

これを現代の音楽学に照らして科学的であるかどうかは、別の問題で、中国の伝統ではこう信じられた。唐代末期の詞が「衛・鄭の声」だといったのは、李清照が、おのれの属する時代なる宋の詞への自負、あるいはいたずく朝廷を讃美せねばならぬその民の遠慮から出たもので、全部うのみにはできないにしても、傾向の批評としては当っている。もっとも彼女はそのことによって唐末の作者を非難しているのではないだろう。非難せらるべきは政治であって詞人は乱世をその音楽に正確に表現した点で価値づけられるに足る作業をなしとげたのだ。

十世紀のはじめから約五十年におよぶ五代は戦乱によって天下は四分五裂し学術文芸の道は閉息した。ただ江南に唐なる国をひらいた李氏は君臣ともに文雅を尊んだので「小楼吹徹玉笙寒」「「吹皺一池春水」の詞がある。その語はたいへんすぐれたものながら、いわゆる「亡国の音楽の哀しく物思わしげ」なるものだ。

唐末から五代にかけての戦乱と世相については小林太市郎『禅月大師の生涯と芸術』につぶさに描かれているのでそれにゆずって、ここでは詞人とその作をいくつか紹介するにとどめる。

欧陽炯（八九六－九七一）『花間集』の序文を書いた人、その三字令。

春たけて／日うらうら／牡丹さく／とばり巻き／すだれ垂れ／おん文に／紅（あけ）の涙／二人の思ひ／／人まさず／燕はかへる／つれなくて／香炉きえ／枕によれば／月さやに／花あはし／こほしかも

和凝（八九八ー九五五）の「薄命女」

あかときを／水時計はなむら透り響きまつはり／窓の星まばらになりぬ／／あさ霧さむく帳にしみ／残んの月かげこずゑにしづむ／夢たえて錦のとばりあはれさぶしく／しひて起くれど眉根うれふる

顧瓊（？ー？）の「河伝」と「訴裘情」

棹さして／舟去りぬ／波の光はるばる／知らず何処へ／岸の花みぎはの草はともになよなよ／雨かすか／鷗鳥相逐ふ／／天離るうらめしさ江の水もむせびなき／ましらの声の切なしや／この心たれにかのべむ／かちまくら／ひとりさぶしく／魂消えて／たきものの香もやこがれむ　（河伝）

永き夜をひと捨てて何処ゆき／便りだにせぬ／たれこめて／ひそめし眉に／月こそ沈め／いかでむごくもおとづれぬ／かなし独り寝／わが心きみの心と代へもせば／このこひしさをさとりなむかも

孫光憲（？ー九六七？）の「閑金門」

とめられぬ／とめたって仕方がない／雪のように白い春着きて／援州を去ったあの日／／ふと別れ／うっちゃったまま／江上を帆ははらみ風はやくなる／うらやましくもおしどりは三十六羽／だのにおおとりはただ一羽

毛熙震（？ー？）の「清平楽」「定西番」「木蘭花」

春のひは暮れかかる／ひっそりとした庭／蝶ふたつ手すりくぐって舞っている／簾を巻けば夕ぞらにそぞろの雨／／うれわしく独りよるねやのとばり／たきものの煙きえ香りのかそけさ／ほんに魂もきえいるばかり

／はるかぜに樹にさきみちた花が飛ぶ　（清平楽）

濃みどりの影ふかき庭／鶯はなきかはし／蝶とびかひ／たはむるる薔薇／／日かげかたむくおばしまに風こちよく／繻ひの衣の移り香や／消息をたまはぬきみの／いつか帰らむ　（定西番）

戸をとざし／とばりかかげぬ／鶯のこゑ庭に満ち春ぞさぶしき／涙かくせど／うらめしききみ／行きて帰らず花はまたちる／／夕陽さす／たかどのや／さきの日のあに堪へめ想ひいだすに／まくら冷たく／屏風わびしく／とばりにたきし薫香だに薄れけらずや

晩唐の温氏がひらいたきらびやかに艶っぽい詞風は、すべてここに引きつがれたものの、さらに繊細優美となった。その綺美は内面化されたといっていい。一面からいえば、唐の詞のもつ素朴さを失った。失うことなしに新しいものを獲得することはむつかしい。とにかく詞は、詩にはほとんどなかった恋愛をうたう道筋を中国の文学に導き、ここまで営々として進めて来たのだ。この時代の頂きに立つのが南唐の李氏。それについては次号で述べることにする。

（一九八三年十二月二十五日一七四五）

※本号の「はがき連句・秋風」は興行を四月―七月と記した。それに間違いないが、初句は原田が昨年の秋に作っておいたもの。それを山本・高橋両氏が四月に付けて、しりごむわたしを歌仙の世界に巻きこまれたのである。だから、一九八二年秋からことし夏にかけての興行とすべきかもしれぬ。「無理強ひ」といいたいような巻きこみではあったが、おかげで楽しい遊びを一つ教えてもらった。感謝すべきであろう。（一二・二五）